

# うしく未来プロジェクト

## 牛久市の新しい富を創出する新戦略

—文化観光を推進する新しい仕組づくりを—



# パリオリンピック2024の挑戦



各国選手らが乗船する2024年パリ五輪開会式のイメージ図  
(FLORIAN・HULLEU/パリ五輪組織委員会提供・共同)



グランパレ、ベルサイユ宮殿などミュージアムや世界遺産でスポーツ競技が開催される。

2024年7月26日に開催されるパリ五輪の開会式は、環境や社会によりよいインパクトを生み出す新しいビジネスを創ろうという志を持った若い起業家たちが新しいコンテンツを実践する社会実験として実施されます。

世界遺産のセーヌ川を舞台にして、ボートに乗った選手団が、アレクサンドル3世橋をはじめセーヌ川を代表する橋の下をくぐり抜け、まちをパレードします。

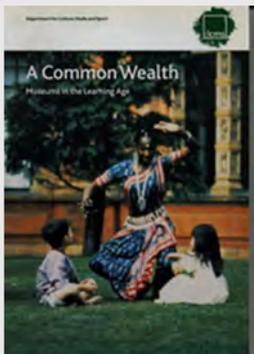
サーカス、ダンス、演劇、音楽、スポーツとミュージアムがデジタルで融合した夢のスペクタクルがくりひろげられ、あらゆる人々が自由なスタイルで参画できます。

パリオリンピックは、これからの文化と経済、そして都市の未来を提起するプログラムで、牛久の未来のヒントをおしえてくれます。

# 新しい富の誕生



英国では、文化遺産は鑑賞の対象ではなく、遊びと学びのコンテンツ。



未来の富を記したD.アンダーソンの著書『コモンウェルズ』とV&Aの学びのプログラムのシーン

私は、2000年に、英国の文化教育政策の未来を起草したヴィクトリア&アルバートミュージアムの副館長であったD.アンダーソンと『ミュージアム国富論』を共同執筆しています。

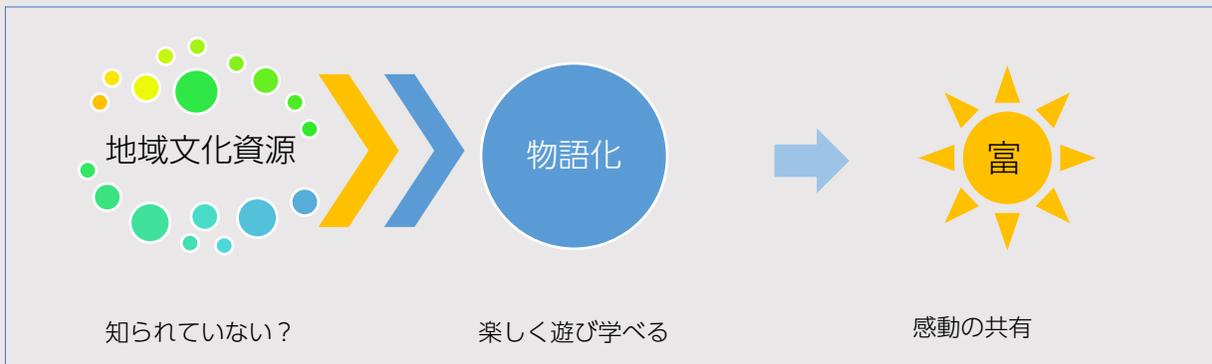
その縁があり、彼とチームを組んで2012年にロンドンオリンピックをプロデュースした英国の文化起業家らと交流をしています。

彼らは、スポーツ、芸術、文化は人々の想像力を育む富の源泉であること。

これからの未来社会は、知と学びがあらゆる人々を豊かにし、それが結びつくことで富がうまれていくこと。

それゆえに、これから先のコミュニティは、人々の遊びと学びの舞台として、富をつくるプログラムを推進していく必要があることを熱く語ってくれました。

# 文化観光推進法



そのような世界の潮流を受け、令和2年に我が国でも「文化観光推進法」が成立しました。この法律のポイントは、文化を保護や鑑賞の対象ではなく、社会の再生につげるための道具と位置づけたことにあります。

いくら立派なコレクションであっても、ケースに入れて展示するだけでは、人々のこころをゆさぶりません。文化資源は、人々の想像力をふくらませる対話や働きかけをすることで、好奇心を刺激し、感動を育むひき起こし、学びに進化させなければ何もうみません。

自然、芸術、スポーツ、そして歴史、生活を含むあらゆる文化は、物語化することで、共有され、はじめて遊びと学びなり、富になります。

文化観光推進法は、国をあげて、文化資源を誰もが楽しく遊び、学ぶことができるように、物語化することで、人と人、人とモノを結びつけることで、富をつくらうというプログラムです。この法律では、文化資源を物語化するための基本計画をつくり、実施体制を整備した自治体や実施主体については、国をあげて支援することが明記されています。

# 次の百年をめざすプロジェクト 城崎温泉

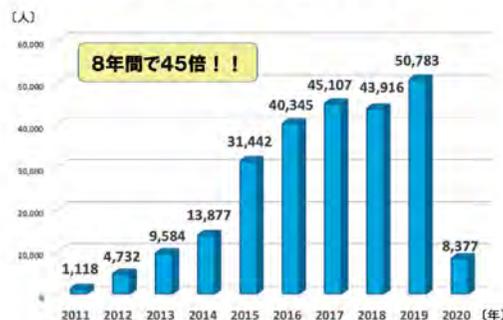


城崎温泉は、まちに本の文化があるまちづくりに挑戦する！



次の百年プロジェクトを展開する若旦那 プロジェクトをスタートして8年で45倍に

【図 10】 城崎温泉外国人宿泊客数の推移



文化観光推進法のキーポイントである文化資源の物語化とそれが富をうみだす仕組みについて具体例で考えてみます。

兵庫県豊岡市の城崎温泉は、現在、世界から学びの創造都市として注目されています。

このまちは、志賀直哉の小説『城の崎にて』の舞台となったところです。しかし、この地は、昭和の温泉観光の失敗モデルとしてとりあげられほどさびれていました。

2013年は、志賀直哉が来湯して、『城の崎にて』を執筆して100年を迎え、100年イベントが行われました。それをきっかけに集った若旦那たちが、目先の観光ではなく、100年先の未来をみすえたプロジェクトが必要であるとの思いを共有し、「城崎温泉旅館経営研究会」を結成しました。

彼らは、城崎の文化価値をもう一度見つめ直し、みがきあげあげようという動きをおこし、「文学のまち城崎温泉の復活」を目標をつくりました。そしてさらに、「お客さまがまちをめぐり、知と学ぶにであう」という事業コンセプトをつくりあげプロジェクトを展開することになります。

# 遊びと学びを育むコンテンツづくりから

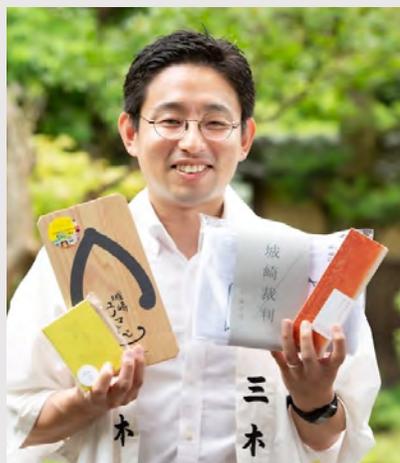


プログラムはミュージアム活動からスタートしました。文学館を「城崎文芸館KINOBU」に改装しました。ここでは、ミュージアムにクリエイターを集い、訪れる人を想像の旅へ誘う学びのプログラムを開発した。“城崎でしか買えない”学び”として開発されたコンテンツが「城崎の本」をつくるプログラムを実行しました。

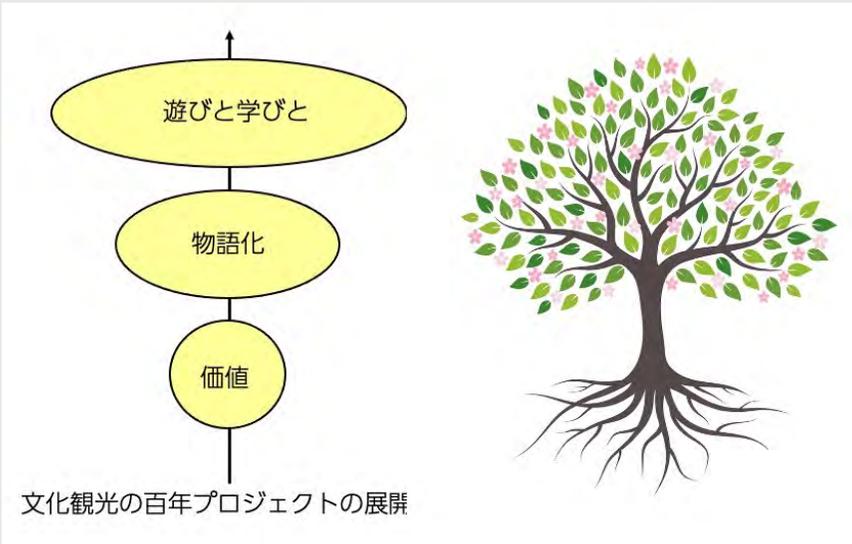
志賀直哉の『城の崎にて』を現代人が楽しんで読書できるよう注釈をつけ、雑貨として楽しめる豆本にしてデザイン出版しました。流行作家を招いて新しい創作活動にも取り組みました。小説家の万城目学さんに、2泊3日×2回滞在して『城崎裁判』という作品を創作してもらい、温泉で読める新しい本をデザインしました。まちから聞こえてくるオノマトペを記録して、ジャバラ絵本にした『城崎ユノマトペ』など「おしゃれな本」などを次々に開発しました。

彼らが開発した「本と学びのコンテンツ」は、城崎温泉のオリジナルミュージアムグッズになり、温泉のお菓子にかわって本がお、おみやげとして大ヒット商品になります。本がお土産として売れると、店主も解説するために本を読むようになる。温泉客の客層もかわり、リピーターが増大します。

プログラムがすすめられた結果、まちのブランド価値は高まり、プロジェクトがスタートして10年、世界中からクリエイターが集うようになり、いま城崎温泉は、アートのまちとして新しいプロジェクトが次々にうみだされるように進化しています。



# 地域のチカラを磨きあげ未来をつくる

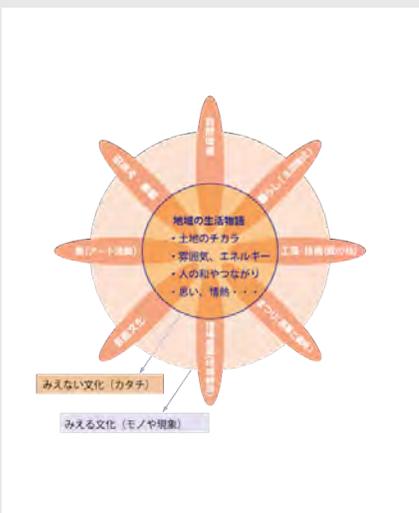


城崎温泉が成果をあげることができた理由は、百年の未来のまなざしにたち地域が持っている本当の価値に焦点をあてることができたからです。目先のビジネスをみていると、温泉やカニというカネになるモノや現象に関心が注がれてしまいます。それらの観光イベントやツアーを組みプロモーションを展開しても、競合が多く、人々に共感してもらう感動を提供することはむずかしい。文学館の展示を更新してもそれは同じです。

城崎温泉の価値とは、作品を想像の舞台となり、クリエイターにとっての想像力を刺激する不思議なチカラがあふれていることです。城崎のなりわいに加え、まちのたたずまい、人とのかかわり、目にみえない城崎のカタチがこそが、城崎でしか提供できない価値で、百年の未来に継承すべき文化です。

それをみがきあげるためには、人々に城崎という土地とそこを舞台に描かれ作品とのかかわりを体験してもらうことで、新しいクリエイターに城崎を舞台にした創作に挑戦してもらうこととなります。それを具体的なカタチにしたのが、再編された城崎文芸館による一連のミュージアム活動です。

この活動をとおして、クリエイターも観光客もさらには、城崎の生活者もその価値に気づくことになりました。その結果として、経済価値を超える新しい富が生まれ、まわりははじめました。私たちはここから、文化観光を成功させるためのヒントを得ることができます。



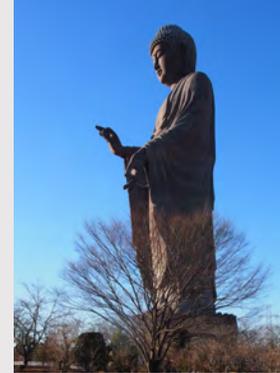
# 文化観光で新産業を創出できる牛久の可能性

## 1-1. インバウンド人気観光地ランキング TOP10

訪日ラボ ロココム  
futikomi.com



©2019 mov inc. / futikomi.com ALL RIGHTS RESERVED. / 複製転載・二次利用を固く禁じます。



インバウンド総合メディア「訪日ラボ」および店舗支援SaaS「ロココム」を運営するmovが発表したデータを参照しています。魅力度ランキングでは最下位の茨城県は、インバウンドの訪日外国人から高い評価を得ています。

茨城県の一人当たりの消費金額は90,872円で北海道、東京、大阪、埼玉に次ぐ全国第5位で、平均宿泊数では25.9泊の全国第1位です。

観光名所に寄せられた最新のロコミデータの集計「インバウンド人気観光地ランキング（茨城県編）」をみると、牛久大仏は、ひたちなか海浜公園に次ぐ、集客と人気をほこります。

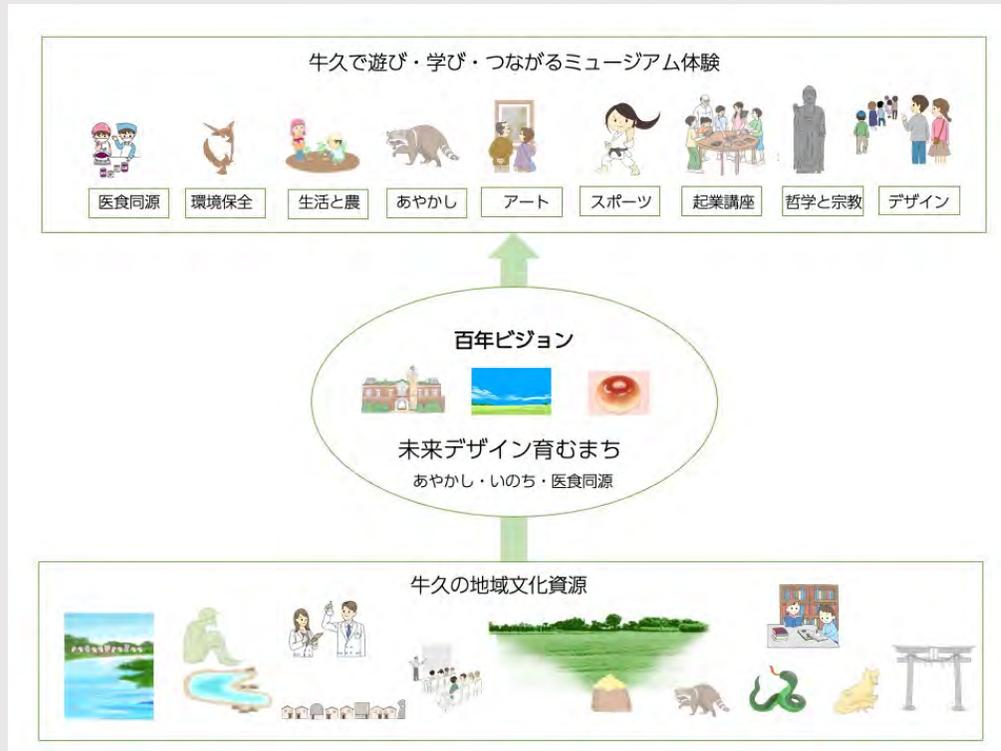
このようなデータを概観してみると、茨城県に長期滞在する訪日外国人に対して、牛久大仏を起点に牛久沼、女化などを周遊する新しいプログラムを展開できれば、産業としての発展も期待できます。

## 2019年（コロナ前）の茨城県に来ていた訪日外国人TOP5のインバウンド消費金額



調査方法：「訪日外国人消費動向調査（2019年）訪問地別1人1回当たり旅行消費単価」および「同 国籍・地域別費用別購入率および購入者単価」より訪日ラボ推計

# 牛久の文化資源を物語化する百年プロジェクト



「新しい富」をつくるという視点からうしくの地域文化資源を見直してみよう。日本遺産牛久シャトーからは、ワイン文化をうみだした牛久の大地のチカラとワインをとおして健康を育もうとした起業家の情熱にであうコンテンツがみえてきます。

明治の文明開化でパンの文化を創造した牛久出身の起業家の物語もみえてくる。

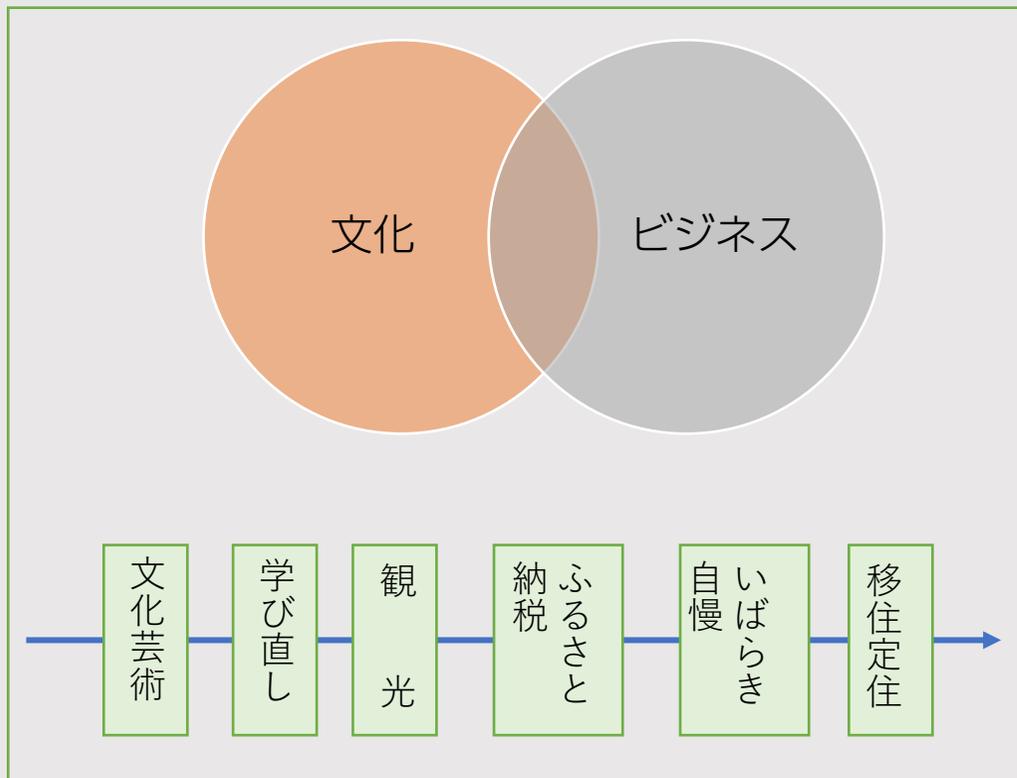
牛久というまちには、未来をデザインする起業家を育む不思議なチカラがあるのかもしれない。

そこから、明治の文明開化で「あんぱん」「ワイン」という新しい食文化を糸口にして、その開発物語をリライトし、ドラマにすることができるかもしれない。健康にやさしい食文化を創造するビジネススクールが開講できるかもしれない。

カッパの伝説のある牛久沼やきつねの恩返しの物語がある女化をはじめ、猪子、狸穴、蛇喰といった地名が、人々の想像力を育むアートであり、コミュニケーション装置となる可能性がみえてきます。

あの世とこの世を往来する「あやかしキャラ」を設定し、新たな作品にする可能性がみえてきます。

# 文化観光を実行するための新しい体制を

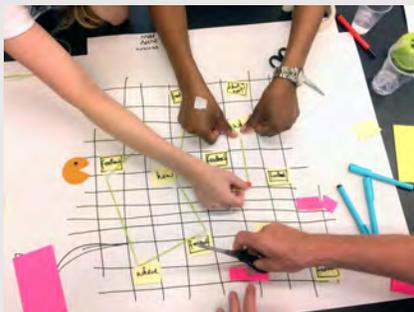


日本遺産の認定を受け、茨城県でも観光入込客数の多い牛久市は、文化観光推進法の対象となる可能性があります。

①牛久市は、国土交通省、観光庁とタイアップしつつ、文化観光推進法の認定を受け、日本の文化観光モデル都市を目指すべきだと思うかどうか？

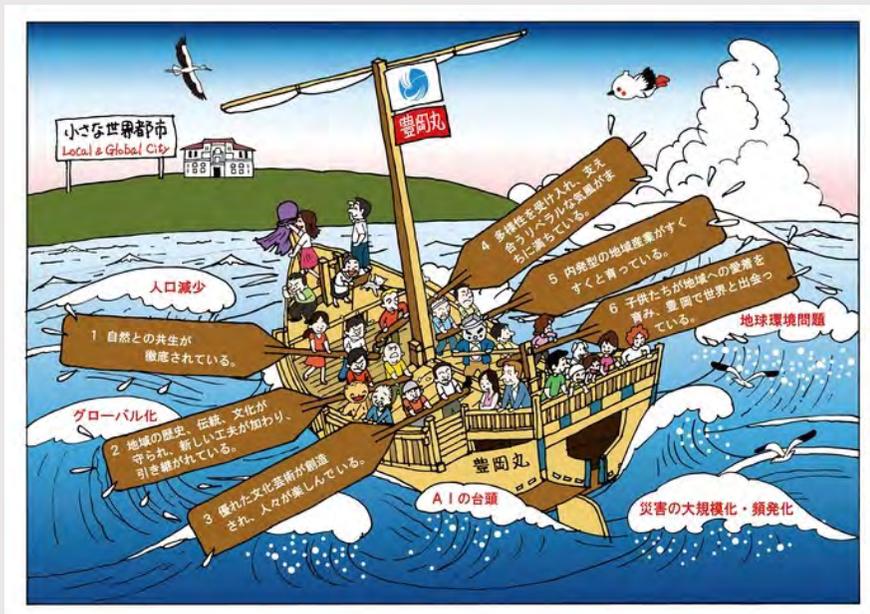
令和4年に博物館法が改正されました。株式会社が博物館を設置し、稼ぐプロジェクトを展開する動きがスタートしています。これまで教育委員会が管轄していた文化施設を経済部門や企画部門に動かし、収益プログラムを展開する自治体も誕生しています。それに加え、DMOや地域商社では、文化を付加価値化し、稼ぐビジネスが成果をあげはじめてもいます。

②文化観光を成功させ、新しい富を創出するためには、日本遺産、文化芸術、ふるさと納税、移住定住の促進、観光など各課で取り組んでいるプログラムを集約し、民間と行政が連携しながらプロジェクトを展開できる新しい制度設計に着手すべきであると判断するが考えを伺います。



地域文化資源の物語化をと文化起業家の活躍

# 参考：「小さな世界都市」をめざす豊岡市の挑戦



豊岡市基本構想のトップページです。



豊岡市の取り組みはメディアでも注目されています。

兵庫県北部に位置し、日本海に面する豊岡市は、人口は約8万2000人で、2040年には3割程度減少し、約5万7000人となると予測されている。

人口減少を抑え、2040年の時点で約6万2000人とする目標値を定め、若者が地方で暮らす価値を創造するプロジェクトに挑戦している。

「環境都市『豊岡エコバレー』を提起し、絶滅したコウノトリを復活させ、コウノトリを育む農法を開発普及し、付加価値の高い農と環境ビジネスをうみだすことに成果をあげた。

閉館されていた芝居小屋を復活させ城崎国際アートセンターとしてリニューアルオープンし、パフォーマンス・アーツに特化した日本最大のアーティスト・イン・レジデンスの拠点として運営している。

さらには、豊岡の強みである演劇とダンス、そして観光を学ぶことができる専門職大学の設立を県に提案し、実現させた。

世界的に有名なカンヌ国際映画祭が開催されるカンヌは人口7万人、演劇祭で最も成功したと言われているフランスのアビニョンは人口9万人であり、それらのアートタウンを目標に設定し、若者が活躍し、学ぶ場をつくる未来プログラムに挑戦している。